

## 大西家所蔵番外曲〈豊崎宮〉等について

関屋 俊彦

はじめに

大阪能楽会館は二〇一七年で以て閉館した。鏡板だけ残され、二階建の建物は今や更地になっている。当時「蔵」と呼ばれていた観世流能楽師大西家が所蔵していた書籍類は豊中市の大西智久邸に移管された。一九〇種類の謡本を始めた蔵書は殆どが手つかずのものである。大西家は初代新右衛門が宝暦一二年（一七六二）に浪華へ出て謡の指南を始めた大阪の能楽師の中では最古の名家である。私は八代智久氏の御厚意により、目下、その解題目録を作成している最中で、二〇一八―二〇年度の科研費に採択された。

今回は、その中で番外曲を念のために紹介したい。能の演目の中で、現行曲以外の曲目を「廃曲」といったり「未刊謡曲」といったりする。『能楽大事典』（二〇一二年・筑摩書房）では「番外曲」で立項する。

大西家所蔵番外曲〈豊崎宮〉等について

### 一 番外曲一覽

大西家の番外曲は西畑実氏（昭和五十二年逝去）が「資料紹介 大西家蔵番外謡本」（『樟蔭国文学』）で昭和四十五年三月から七回にわたって九十曲が紹介された。当時は拝見するにしても相当な御苦労があったと思われる。そして、それらは田中允氏『未刊謡曲集』十八（古典文庫）の解題によって、「西畑氏の絶大な御厚意により、原資料に目を通して頂くことが出来」、すなわち「披見を許して下さった大西家」とあるので大西信久氏の時代であっただろう、五種に分類し紹介されている。それらは「いずれも観世流節附で、近世中期以後の写本である」とされる。特に第一種は「福王流（京観世）系統の番外曲グループに属すべき」とされる。以下、大西家所蔵の番外曲には田中氏が分類されたように一番綴と二番綴を中心としたものがあり、更に樋口本系・非樋口本系・西畑氏紹介本以外のもの・曲舞に分類されている。残念ながら私

自身の作業でも見出すことのできないものもあり、逆に田中氏が番外曲とされている中には現行曲も含まれている。ただ、西野春雄氏の『古今謡曲解題』（同刊行会・昭和五十九年二月）及び「古今謡曲総覧」（『能楽研究』九十二・九十三年度）「能謡同名異曲考」は芳賀矢一氏『古今謡曲総覧』等を含めて、現行曲・番外曲がどの活字本にあるかを頭注に示してくれたもので参考とした。いずれにしても田中氏の調査表を参照にして、ここでは曲舞を除いた完曲を五十音順にして並べ替えてみた。

〔明石上〕・〔悪源太〕・〔曙〕・〔総角〕・〔阿古屋松〕・〔足引〕・〔飛鳥寺〕・〔愛宕空也〕・〔稜威光〕・〔安之字〕・〔生捕盛久〕・〔伊弉諾〕・〔石神〕・〔板敷山〕・〔一番狸々〕・〔市原小町〕・〔稲舟〕・〔空蟬〕・〔馬乞〕・〔雲林院小町〕・〔猿通寺〕・〔逢坂物狂〕・〔岡崎〕・〔隠岐院〕・〔小倉御幸〕・〔御駒乗〕・〔女沙汰〕・〔景季〕・〔笠寺〕・〔香椎〕・〔竈山〕・〔紙屋川〕・〔革袴〕・〔神崎〕・〔菊水〕・〔北山〕・〔貴布祢〕・〔清重〕・〔清水小町〕・〔切兼曾我〕・〔空也〕・〔草薙〕・〔九十賀〕・〔久米〕・〔黒池龍神〕・〔現在実盛〕・〔現在七面〕・〔恋妻〕・〔恋松原〕・〔降魔〕・〔国府津〕・〔小式部〕・〔小侍従〕・〔小林〕・〔五筆〕・〔五輪碎〕・〔誉田〕・〔金毘羅〕・〔嵯峨女郎花〕・〔桜井〕・〔真田〕・〔更科〕・〔座論〕・〔侍従重衡〕・〔篠村〕・〔鳥廻〕・〔狸々前〕・〔志賀忠度〕・〔十番切〕・〔上宮太子〕・〔薄〕・〔鈴木〕・〔西岸居士〕・〔先帝〕・〔袖湊〕・〔卒都婆流〕・〔大内裏〕・〔太木〕・〔篁〕・〔高安小

町〕・〔武文〕・〔龍崎〕・〔玉津島〕・〔湛海〕・〔誕生寺〕・〔経盛〕・〔露〕・〔当願暮頭〕・〔豊崎宮〕・〔豊原寺〕・〔泣不動〕・〔花自然居士〕・〔浜平均〕・〔馬融〕・〔櫃切曾我〕・〔一言主〕・〔人丸〕・〔火鉢〕・〔富士見小町〕・〔二本杉〕・〔法界寺〕・〔星降〕・〔細谷川〕・〔法華云〕・〔母衣〕・〔待宵小侍従〕・〔松竹〕・〔真名井原〕・〔鞠〕・〔滲標〕・〔御崎〕・〔湊川〕・〔妙法院〕・〔武蔵野〕・〔夢想松風〕・〔名香〕・〔明静〕・〔鴟の草茎〕・〔文学〕・〔文学龍詣〕・〔柳〕・〔山吹〕・〔山本小町〕・〔八幡弓〕・〔幽霊小町〕・〔幽霊曾我〕・〔雪鬼〕・〔雪女〕・〔雪頼政〕・〔由良物狂〕・〔吉野〕・〔吉野琴〕・〔龍〕（別名〔褒似〕）・〔酈縣山〕・〔連獅子〕・〔良弁〕・〔六角堂〕・〔和国〕

以上だが、中には〔妙法院〕とか〔稜威光〕〔豊崎宮〕といった依然知られていない曲が含まれていない。その三曲をとりあえず紹介しておきたい。

## 二 〔妙法院〕について

### 【書誌】

『妙法院』袋綴板本一冊

内題…「無声音」。

外題…白地横茶線模様覆表紙、水茶波紋地模様題箋二二〇×二九

mm・「妙法院」

寸法…二四二×一六五mm。緑糸綴四穴。

丁数…墨付二丁。

奥書：明治十六年七月・朱角印「梅津家四十二世」「梅若實」  
備考：白薄様挟紙一枚一五八×一〇五mm。

【翻刻】

〔凡例〕

一、田中允氏『続未刊謡曲集』二十二にも田中氏蔵本を底本とした翻刻（無刊記）があり（大山範子氏教示）、別に高安六郎氏蔵本は戦災で焼失との指摘がある。田中本に異同がある場合は傍記した。

一、フシ等の記号は省略した。

一、旧漢字・カタカナはなるべく活かした。

一、本文には句読点を用いず、字間のアキで示した。

無声音

（冒頭、田中本では「世はかりでもとみだれつ、」で始まるが、これは観世本の書込みと同文である）

サシへあかねさす 日もいとくらく せみの小川河に きりたちて  
同へだての雲成となりけり うらいたハしや 玉きはる 内同  
裏に朝ゆふ とのあせし

クセゝ実美公や季知卿 壬生 澤 四条 東久世 其外錦の小路殿  
世今は浮草うきくさのさためなき 旅にしあれば 駒さえも すゝミかね  
てはいあひひつ、 降ふしく雨の絶間なく 涙に袖の ぬれはて、  
是より海山浅茅はらが原 露霜きわけてあしが散

大西家所蔵番外曲（豊崎宮）等について

（上ケ歌）シテ入難波の浦にたくしほの（同）へからき浮世物はものか  
はと 行かんむとすれば東山 峯の秋あきかせ身みにしみて 朝なゆふな  
に聞きなれし 妙法院の鐘の音も 何と今宵こよひはあわれなる いつ  
しかくらしき雲霧を 拂ひ尽して百敷の 都の月をしめて給ふら  
む

明治十六年七月 朱角印「梅津家四十二世」「梅若實」

【考察】

インターネットの「観世アーカイブ」に同装丁表紙のものがある。その解題に「初世梅若実が刊行した新作の曲舞謡。刊記に「明治十六年七月（印「梅津家四十二世（印「梅若實）」とある。裏表紙に「明治十八年三月廿日／梅若實宅ニテ諷フ／時ニ合手半二郎也」と朱書きされる。墨書で詞章の訂正や振り仮名等の書き入りが施されている。表紙と二丁目の間に、「妙法院」の詞章全体を朱で訂正した挿し紙が挟まれている。挿し紙の後半に記される謡い物については未詳」とある。田中本に「無刊記」とされる奥書書込みが大西家本と観世家本にはある訳である。

以下、これに付け加える。梅若家四十二世とあるも明治十六年のころの梅若六郎家は五十二世の梅若実氏実（明治四十二年八十二歳没）に該当する。『梅若実日記』（二〇〇二年十月・八木書店）第四巻の明治十六年七月十五日の項に「妙法院事無声音謡今日取極候」とあるのに合致する。

尚、観世家本に「明治十八年三月廿日云々」とあるのは、同じ

く『梅若実日記』の「一調 無声音 実／半次郎 今日初テ勤ル」に合致するが、実際には十八日より始まった能楽堂大宮様行啓御能の三日目にあたるようである。

内容は幕末文久三年（一八六三）のころ尊王攘夷派の公家七名が長州へ逃れた事件を扱ったものである。本文にはその（三条）実美・（三条西）季知・壬生（基修）・澤（宣嘉）・四条（隆詞）・東久世（通禮）・錦の小路（頼徳）の名前が謡い込まれている。薩摩藩・会津藩の公武合体派が御所を制圧し、七卿は御所への出入りを禁じられ妙法院に移り画策したが、結局、退去することとなった事件である。名刹妙法院の史料は妙法院門主三崎良泉大僧正の子息義泉氏を中心に『妙法院史料』全七巻が吉川弘文館から刊行されている。それを支えてこられた村山修一氏に『皇族寺院変革史』（二〇〇〇年十月・塙書房）があるが、それによっても幕末のころの真仁親王の時も囃子謡曲仕舞を嗜まれていた歴史があった。

なお、先述した『梅若実日記』には（妙法院）が散見するが、中で注目されるのは明治十六年八月五日の記録で「午後四時より今戸細川様へ三条実美公御出ニ付罷出ル。鉄之丞同道。妙法院ノ謡有之。夜十一時帰宅。」とあるのが注目される。実美公御自身の前で謡ってみせたというのである。

ちなみに、内題の「無声音」とは声帯の振動を伴わないで発する音声のことでp・t・kなどがそれに相当するという。

### 三 〈稜威光〉について

#### 【書誌】

形態…写本仮綴一冊。

内題…「稜威光」

外題…打付書「稜威光」

寸法…二四三×一六五mm。紙縫綴穴四穴。

丁数…本文墨付全九丁。

「あらずし」

一声で神功皇后が登場し、新羅を征討せんものと気長足姫尊は軍勢を整え和にの港を出立すると謡う。以下、定型の道行（上ゲ歌）で、筑紫の海に出ても方向が見定まらなかったが大小の魚が船を背負って導くのに合わせて鼓笛ではやしたてる。陸地に近づくに従い暴風が起こり、数万の人家を沈める。一方、敵の王は数百の軍艦を見て慄き慌てふためく。これは噂に聞く神仙の国の神兵であろうと、臣下に素性を確かめに行かせる。臣下は舞台の船に向かつて伏せっている。武内宿祢が兵士に命じて臣下を捉えさせる。宿祢は新羅の使節なら、この征討軍に国王を連れてこいと命じる。臣下は戻って、その由を告げる。国王は進退窮まって降参することを決意する。捕縛され多くの珍宝を携え、宿祢の前にひれ伏す。宿祢は、こちらにいらっしゃるのは気長足姫尊で自分は武内宿祢である。こうして行幸したからには降参せよという。

それに応えて王自ら自分は新羅国王波沙寝錦で降参して貢物を持参したと答える。そこに將軍が勇んで皇国の御稜威を示すためにも殺すのがよからうと進言する。皇后は、それを止めて、降参してきた者を殺すのはよくないといって宿祿に繩を解かせる。宿祿は皇后の慈悲で命は助けて馬飼にさせましようといって、兵士に繩を解かせる。国王は喜んで、誓詞をしたため、貢物を差し出す。以下、クセの謡で今からのちは自ら馬飼となつて年々貢物を献上しましょう、この誓言は太陽が西から昇らうと変わらないものである、これをのちの印にせよと謡う。金銀珠玉の貢物が納められ、舞樂が奏される。君子は慈しみをなし、その徳はいついつまでも続く。こうして貢物は絶えることなく、内宮家を諸国に定めて、ついに船の纜を解き、勝鬨を揚げて帰国するのであった。

#### 〔考察〕

曲名の読み方は本文の「御稜威」のルビに「ミイツ」とあるのが参考となるようである。ちなみに明治のころに「うつひかり」という四股名の相撲取りがいたようである。

戦時中の作であることは確かだ。作者の高揚ぶりは伺えるものの、冗舌な長文で大勢物、敵味方の場面が交錯し、船の作り物や派手な武器類・装束を準備しなくてはならない。謡だけで舞台に取り上げられることはなかったであろう。神功皇后や武内宿祿・新羅王が出てくるので強いてあげれば〈三韓〉に近い曲であろう。同曲は『古今謡曲解題』によると高木半作詞・観世清廉作曲になる

ということなので、生田秀と高木半のかかわりも考えなくてはならない。

#### 四 〈豊崎宮〉について

##### 【書誌】

① 『豊崎宮』一番綴写本仮綴一冊。

内題…「豊崎宮」

外題…「豊崎宮」(打付書)

寸法…二五〇×一七〇mm。綴なし。

丁数…本文墨付六丁。

前書…内題下に「入江来布作詞／大西信久作曲」と記す。

② 一番綴原稿箋写し『豊崎宮』

標題…「豊崎宮」／入江来布作詞／大西信久作曲

寸法…緑線原稿用紙(二十二字×二十行)二二八×一五〇mm。

桃色紙縫二穴綴。

丁数…本文朱入墨付七枚。

③ 『豊崎宮』無綴写。

内題…「豊崎宮」

寸法…二五〇×三五〇mm。

丁数…本文墨付三枚。

④ 『豊崎宮』無綴写。

内題…「豊崎宮」

寸法…二五〇×三三三mm。

丁数…本文朱入墨付三枚。

【考察】

大西智久氏の父君信久氏（昭和五十八年二月逝去）の作詞である。氏の『初舞台七十年』には触れられていない。入江来布は俳人。昭和三十一年没（七十二歳）。『和歌俳諧人名辞書』（昭和六十一年・臨川書店）によると「名新三郎 大阪天下茶屋住 「巻鳥」同人」とある。ほかに『銀扇』等の著作、主宰俳誌として『梅花』がある。

【あらすじと小謡】

あらすじは、「次第」でワキ男、供の者と登場し、孝徳天皇難波奠都、一千年の祭を寿ぎたいと告げる。季節はまた雪の残る初春、中津川、淀川を越えて豊崎の里に着く。豊崎神社に参拝しようという。「一セイ」でシテ登場。連綿と二千六百年続く天皇の威光はくまなく仰がれると謡う。長柄の宮の真木柱は太く高く、難波の宮は海も近く、噂を聞く人が見たいもの、一方見た者は見飽きない難波湯であり、昔こそ、難波田舎と言われたようだが、今は盛りりの都で栄える大阪市の頼もしいことよと讃嘆し、中入する。「問答・語り」があるはずだが、間狂言のセリフは残っていない。「生駒の嶺の朝霞、八十島かけて夕茜」とのワキの待謡があり、地謡が「たちまち神殿鳴動して、地軸裂くると見るまも疾しや」と歌い上げると、難波の大宮居が現前し、「聖武天皇の勅により、難波

の宮を改め造るの事に仕へている式部卿藤原の宇合なり」と後ジテが名乗る。以下の部分謡（小謡）は翻刻文を揚げる。

「サシ」シテ「弥生の春に応神天皇、みゆき太しき大隅の宮柱、地「うはぬりまさぬ仁徳天皇、高津の宮の高き屋にみそなはします、獻慮にて賑ふ民や庭竈、そのあら垣のあら陵や、仏法最初の四天王寺は、シテへ上宮の太子の御誓願、地へ九輪、水煙、鳴尾、風鐸、迦陵頻伽の音を和して、和をこそ貴ぶ大みのり、海の外まで輝けり、茲に皇紀一千三百有五年、人皇第三十六代、

「クセ」地へ孝徳天皇しろしめす、御代のはじめや年号のはじめ、大化の元めつ年、難波長柄豊崎に、都ぞ奠めまします、翌る正月さす初日、大化改新の大詔をこそ換発し給ふ、一に曰く普天の下、率士の濱、千代の民草一様に、大稜威にぞ被ひ給ふ、二に曰く、京師を修め畿内を整へ、山河都邑を定め、三つには戸籍、計帳、班田を制定し、四つには絹繩、絲繭の調を行ふ、

シテへほしいま、なる専横を斥け、同へ天日あらたに雲を出づ、光輝燦たり赫灼たり、まことや未曾有の大典とて、百官百僚ひれ伏して、詔を承けては必ず謹み、庶政一度にあらたまり、上下萬民鼓腹して、仰がぬものこそなかりけり、く、シテへ御庭をめぐる玉椿、やがて春光蘭なり、同音「たくみの大匠比羅夫を召して、界を定め標を建て、八年費す大内裏、其状ことく論ふべからず、朱雀門より坦々と、大道南に貫きて、宮殿、楼閣巍然たり、碧瓦、朱桷、燦として、人目を眩ずるばかり、八省整ひ、里坊成り、江

口に帆檣<sup>ふなざし</sup>と立ち、輪輿<sup>りんぐわん</sup>の美、規模の宏大、前代未聞と拜まる、以下、明治維新の際に大阪遷都さえ画策されたとの歴史を踏まえた地謡のあと、シテの「神舞」があり、大阪賛歌で結ばれる。

おおよそ以上だが、小段名としての「クセ」以下は判断に迷うが、とりあえず「二段グセ」と考えておく。独吟部分の小謡は③のものを使った。ほかは極めて軍事色の濃い詞章になっているのだが、③は随分と様相が異なっている。入江氏の推敲が伺えるところであるが、あるいは③は複数案を示しただけでなく、戦後、間もないころ書き直して独吟用に仕立てたものかも知れないと今は考えている。いずれにしてもキリの部分が欠けている写しもあるところを見ると習作と位置づけた方がいいようである。

さて、この豊崎神社であるが、大阪市北区豊崎六丁目に鎮座する神社である。正暦年間（九九〇～五年）藤原重治が開拓にあたり孝徳天皇を祀っている。孝徳天皇（五九六？～六五四？）は手近な『日本史小辞典』（山川出版）によると系譜上の第三十六代天皇。父は茅渟王・母は吉備姫王。大化改新の時に即位。六五一年（白雉二）難波長柄豊崎宮が完成したが、ほどなく中大兄皇子と意見が対立し、飛鳥に戻る事態となり、失意のうちに没した、とある。神社は淀川に面しているが、実は元の大坂能楽会館があった場所とは直線距離にしてそう遠くないところにある。智久氏から氏神様として毎年宮司さんに拝みに来てもらっているとも伺っていた。

平成三十年八月三十日になって、豊崎神社を訪れ、友田昇宮司とお話する機会が持てた。宮司は当初、謡曲が作られていたとは疑っておられたが、謡本文をお見せすると当社に間違いはないとおっしゃってくださった。私としては信久氏が清書されたものを奉納されていたのではとかすかな期待を持っていたのだが、そうではなかったようだ。尤、未整理の蔵書が数多く所蔵されているようで、あるいはその中にあるのかも知れない。いずれにしても大変喜んでくださって、孝徳天皇を祀っているのは当社だけである、近くの豊崎小学校では、どうやら山本博通氏が生徒たちに謡・仕舞を教えていらっしゃるといふ話も聞くことが出来、孝徳天皇の一三五〇年祭も予定しているとのことであった。翻刻紹介した謡曲（豊崎宮）の仕舞なら現在でも十分に耐え得る曲であると思っている。

#### おわりに

今後の課題として（豊崎宮）作詞者の入江来布については、実は関西大学図書館にも『弔素石句集』・『銀扇』・『西行思想と現代俳句観』・『入江来布書簡』・『白桃』・『佐保姫句賛』・『入江来布色紙』二枚・『入江来布短冊』があるが、いずれも貴重書乃至特別図書になっている。校正中、確認したが大西家とのかかわりについては不記載である。インターネット検索でも膨大なサイトが出てくる。たとえば箕面市の西江寺に「三千の世界は須臾に今朝の秋」の句

碑があるという情報であるが未確認のままである。

なお、生田秀と大西閑雪のかかわりに焦点を当てて一方であったので、そのあとの大西信久等の動きはさして調べてこなかった。たとえば大西信久『初舞台七十年』に大正十五年八月に手塚（大西）亮太郎が「恩師の、梅若実・大西虚雪・大西閑雪の三人の追福菩提をとむらう碑を高野山に建て」たとするもののその場所が特定できなかった。しかし、『観世』昭和四十一年十月号に信久氏自身が「千鳥会旅行記」で七月二十七日に一行と高野山詣をし、奥の院の「観世家の御墓所に御線香を供え、そのわきにある手塚の伯父伯母の御墓に合掌する」とし、同碑の前には明智光秀の墓があるとも記している。また、その墓の管理は増福院であることが掲載の写真によって知られる。私自身は平成三十年八月二日に手塚稔子氏から御教示を得、増福院を知り鷺峰賢昭代表役員にお目にかかって、大西家と観世家の深いかかわりを教えていただいたことである。

以上のように研究は、まだ道半ばであるが、今回は標題に絞って報告した次第である。

#### 【付記】

本稿は、科学研究助成金基盤研究（C）「大阪能楽会館蔵書解題目録の作成ならびに茂山千五郎家と青家のかかわり」（課題番号18990955研究代表者 関屋俊彦）に基づく研究成果の一部である。



# Bangai-kyoku (the Extra Numbers) Possessed by the Ohnishi Family and Toyosaki-no-miya (the Toyosaki Shrine)

SEKIYA Toshihiko

The Osaka Nohgaku-kaikan was closed in 2017; thus, only the *kagamiita* (backdrop scene panel) is left, and the two-story building has been demolished. The books owned by the Ohnishi family, the Noh master of Kanze school, which were called *Kura* before that time, were transferred to Tomohisa Ohnishi's house in Toyonaka City. Most of the 190 kinds of book in the collection, including song books, are left untouched. The Ohnishi family is the oldest and most prominent family among Noh performers in Osaka, beginning their work when founder Shin-emon moved to Naniwa in 1762 to start teaching Noh songs. Fortunately, owing to Tomohisa the 8th, the author is approximately halfway through creating a catalog of the books, with support from the Grant-in-Aid for Scientific Research fund from 2018 to 2020.

This paper aims to introduce the extra numbers, focusing on Toyosaki-no-miya (the Toyosaki Shrine). In a Noh program, songs besides the existing numbers are called “abandoned songs” or “unpublished songs.” *The Noh Dramatic Encyclopedia* (Chikuma Syobo, 2012) defines these as “extra songs.” Some of the collections possessed by the Ohnishi family have been introduced, in total, seven times since March 1970 by Minoru Nishihata (died in 1977) in his serial articles—“Shiryō Syokai Ohnishi-ke Bangai Utai-bon” (Research Data on extra songs in the Ohnishi family's possession) and “Shoin Kokubungaku.” Thus far, 90 songs, whose contents are described in “Mikan Yokyoku-syu” (Unpublished Music Collection) “Koten Bunko,” and other publications, have been newly found. However, some previously unknown songs, such as “Myohoin” (Myohoin Temple) and “Aya-no-ikou” (Lightening of Aya) are also included. “Toyosaki-no-miya” is one of such songs and, of course, has not been studied yet. The song was written by Nobuhisa (died in 1985 at the age of 80), Tomohisa's father, setting the story at the eponymous shrine near the Yodo River in Osaka city. Apparently, the Ohnishi family worshipped the Toyosaki Shrine as their *ujigami* (local deity). The author aims at introducing “Toyosaki-no-miya,” considering the golden age of Nohgaku in Osaka (known as Huge Osaka) at the time of Kansetsu the 5th, when the Ohnishi family supported the Iwai family—one of the five prominent families in Kyoto.

キーワード：大西家 (Ohnishi Family)、能楽 (Noh play)、〈豊崎宮〉 (Play text of Toyosaki Palace)、番外曲 (Extra songs of Noh play)

